

第317回くらしの植物苑観察会 令和7年11月22日(土)

菊の栽培書を読む—栽培道具を中心に—

平野 恵 氏(台東区立中央図書館 郷土・資料調査室 専門員)

菊の栽培書には、花卉の形、苗床の作り方、栽培道具、防虫害、観賞法、輸送法など様々な要素が図解されて記されている。今回は、栽培書『後の花』と『菊経』を中心に、このなかから栽培道具を採り上げてその用途に注目する。『後の花』は正徳3年(1713)刊、『菊経』は宝暦5年(1755)刊と、約40年の隔たりがある。

1. 一般的な栽培道具

①農具

菊の栽培書には、菊だけには限らない、一般的な栽培道具も図と簡単な説明とともに掲載されている。ここでは、農作業に使われる農具を挙げていく。

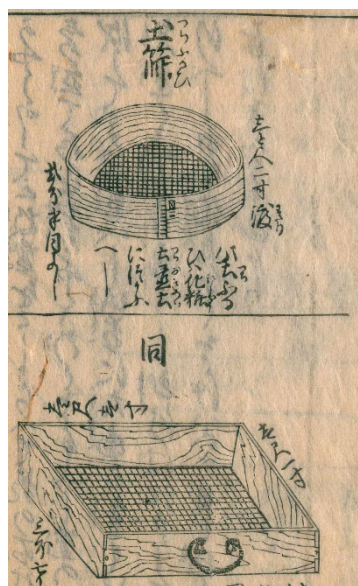


図1 ふるい『後の花』

国立国会図書館蔵

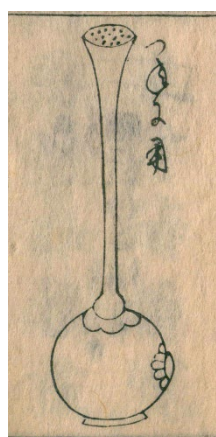
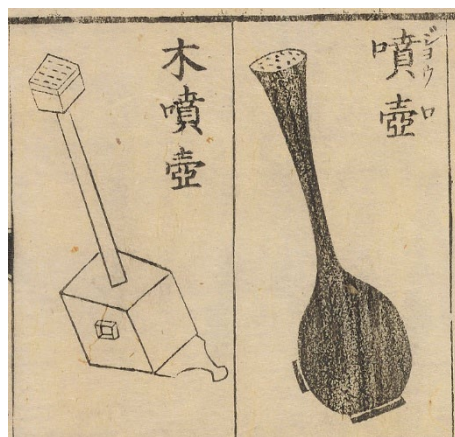


図2 ふるい『菊経』個人蔵

ふるい、鎌、計測具、雨具、清掃具、鋤、運搬具、鋤、水遣り道具、刃物類など、農具全般に通用する道具が記されている。ふるい(図1・2)は、粗い目のものと、細かい目の2種類を使用するとしている。しかし図1では、細かい目は化粧土用、図2では実をふるう目的とし、用途が微妙に異なっていた。

②園芸用品

ハサミ、シャベル、じょうろ、腰掛、踏み台など園芸用品も他の植物にも援用できる道具が採り上げられている。ハサミは、用途別に花鋏、鋏、小鋏、燕尾と4種類も描かれていた。花鋏は、剪定ハサミのような形状をしており、燕尾とは、燕の尾のように細長く先端が2つに分かれた形をいい、持ち手の丸い輪の部分をいう。小鋏は糸切ハサミ、鋏は糸切ハサミの刃の大きなものであった。高度な園芸技術はこうした細分化した道具の運用であったと実感できる。じょうろは、図3では1種類だが、図4は木製と金属

図3 じょうろ
『後の花』図4 じょうろ(木製と金属製)
『菊経』

(銅) 製の2種類に増え、細分化した道具の一例である。また、木製は塗りつぶしがなく、金属製は黒くぬりつぶされており、材質による表現の違いも注目される。

2. 菊独自の栽培道具

菊は、苗床で育てた苗を花壇に移植する植え替えを行う。その際、ゴルフのドライバーのような「鏟」という道具を使う(図5)。鏟は「こすき」と振り仮名があり、その下に「シャクシナリノスキ」とある。「杓子形の鏟」の意と思われる。説明文は、「鉄を以て之を作る。用いて以て^{うえかえ}転移の時、^{はち}塚を^う承く」とある。「塚を承く」とは、花壇の縁を突き固めることと考え、「ならし」の道具とした。鉄製とあり、図4右側と同じく黒く塗りつぶされている。その右の「槌」の説明は、「用いて以て^{まがきちく}籬竹の上頭を打ち着せしめ、深く土内に^{はさ}挿み入る」とあり、花壇観覧時の結界である竹を土中に立てる用途の道具である。黒塗りのため、こちらも金属製と考えられる。なお、花壇の縁を整備している図は、約100年後の弘化3年(1846)刊の栽培書『菊花壇養種』に描かれ、ここでは板で花壇の四方を囲い、その板を土中に立てる作業に槌を用いている(図6)。



図5 ならしと槌『菊経』



図6 植え替え『菊花壇養種』国立国会図書館蔵

そのほか、菊の結い立てに用いる「藺がら」や、その藺がらを入れるための籠を「結苧籠」という独自の呼称を用いるなどの菊独自の栽培道具の描写があった。

今回は、栽培書から道具を抽出して、その特徴を検討した。菊の栽培書といいながら、農業や園芸全般にわたる道具が記され、他の植物にも今回紹介した道具が使用されていることが容易に想像できることが判明した。また、苗床作りのための道具は、菊ならではの特徴であり、重要であったと考えられるが、先行する栽培書『後の花』には描かれず、『菊経』に記されている点から、栽培書が進化している点が明らかになった。

.....

次回予告 第318回くらしの植物苑観察会 令和7年12月20日(土)

「名前からひもとくサザンカの伝播」

加地 典子(日本ツバキ協会)

13:30~15:30

くらしの植物苑 東屋 申込不要 定員30名